



株式会社エフエム山口

所在地	山口市緑町3-31
連絡先	TEL 083-923-2100
H P	https://www.fmy.co.jp/
代表	藤井 正史



ホームページ

今月号では、株式会社エフエム山口の代表取締役社長 藤井正史氏にお話を伺いました。



沿革

- 1985年 4月 会社設立
- 1985年12月 開局
- 2025年12月 開局40周年を迎える



本社外観

●ラジオに魅了された子ども時代、憧れた業界へ

エフエム山口は県内初の民放FMとして昭和60年12月に開局し、昨年40周年を迎えました。会社設立は同年4月で、私はその8月に入社。開局前から在籍していたことになります。当初はまだ自社の建物も建設中で、山口放送山口支社さんの会議室を借りて開局の準備を進めていました。

ラジオとの出会いは小学生のころです。夏休みにラジオ体操の広場へラジオを持って行き、出席カードにハンコを押すのが6年生の役割でした。それをきっかけに父に買ってもらったのが、ソニー製の一台。そこからラジオにのめり込みました。

ただ、思い返すと、もっと幼いころの記憶もあります。夏休みは祖母の家に預けられていて、勤務先の農協についていくと2階に電話交換手の部屋がありました。大きな機械にケーブルを繋いで電話の取次ぎをする姿を間近で見て「素敵だな」と感じた記憶が今でも残っています。スタジオにある機材と似通っているところもあり、それがラジオ好きになる原点だったかもしれません。

高校卒業後は日本大学芸術学部放送学科へ進み、ラジオ局で働きたい、ラジオドラマを作りたいという気持ちで音声・ラジオ番組の制作やスタジオオペレーションを学びました。しかし就職活動は思うようにいかず、某住設メーカーに就職。当時は営業マンが夜中に機器を運んで工事を進めることも日常茶飯事でした。爪は真っ黒、草靴はセメントで真っ白。充実の日々を過ごしなが、もちろん違和感もありました。3年が過ぎたころ、「山口に民放FM局ができる」という話を耳にしました。私は迷わず応募し、面接では3年分の思いがどっと出ました。その熱量が採用につながったのだらうと思っています。

念願かなってラジオ局に入りましたが、前職の経験が買われてか営業に配属されました。2年後には東京支社へ転勤になり、入社して十数年は営業畑を歩きました。本社に戻ってきた頃には後輩がたくさん入っており、気づけば管理側になっていたため、希望していた制作現場には立つことなく今に至ります。いまだにラジオドラマをつくらないのは心残りです。



代表取締役社長 藤井正史氏

●番組放送と企画で地域をつなぐ、エフエム山口の事業

基本の事業はまず番組の企画・制作・放送です。県域で放送免許を取得して運営しています。地方局としてはオリジナル番組が多く、番組表の約30%を自社制作番組が占めています。月～木曜は約7時間、金曜は約9時間以上を自社スタジオから生放送しており、TOKYO FMをキー局とするジャパンエフエムネットワーク(JFN)の加盟局として、生放送のない時間帯にはTOKYO FMやJFNC制作の番組をお届けしています。

放送は本社内のスタジオだけでなく、新山口駅北口駅前広場のサテライトスタジオ「0 Studio (ゼロスタ)」からも、平日は毎日生放送を行っています。

ゼロスタは、新山口駅周辺の再開発時に山口市が取ったアンケートで「サテライトスタジオがあったらいい」という声から設置が決まり、当社に声がかかりました。そんな意見があるとは思っておらず、「嬉しくて驚いた」というのが正直なところ。新山口駅は山口の交通の起点・終点となる主要な駅で、各地の高校生をはじめ様々



第一スタジオの生放送中の様子

な方がスタジオ前で立ち止まって聴いてくださっています。

そのほか、商品開発や集客など音声メディアを活用した支援も手がけています。営業担当とお客様とで話し合いを進める中でどのように着地するかは異なりますが、例えば今年1～3月には資さんうどんと人気番組「サムデー」がコラボした「ぶちしあわせセット」が山口県の店舗限定で販売されました。湯田店のオープンをきっかけに企画を練り、番組パーソナリティーとリスナーからアイデアを募って実現したものです。ただCM 1本あたりの金額を提示して提案するよりも「こんな企画、こんな番組ができます。一緒にやりませんか?」と共に盛り上げていける提案を大切にしたいと思っています。



社内には数千枚のCDが保管されている



放送状況の確認・CMの発信などを司るマスタールーム



マスタールームの裏側に設けられたサーバールーム

● 40年目の感謝と挑戦

開局40周年を記念して、「続けてもいいですか」というキャッチフレーズのもと、昨年10月～今年3月まで、様々な企画を実施しました。宇部市出身のシンガーソングライター上野大樹さんによるアニバーサリーソング「you you」の制作や、周年を記念したオリジナルグッズの制作・販売。ウルフルズの記念コンサート開催、元日には11時間を超える朝から晩までしゃべり通しの特別番組を生放送するなど周年ならではの盛り上がりを見せました。これだけの企画を形にできたのも、長年にわたって耳を傾けてくださったリスナーの皆さんがいてくれたからこそです。これから様々な取り組みを続けていくことで、感謝を伝えていきたいと思っています。

● 想像力を掻き立て、人を動かせる音声メディア

ラジオは本を読んだりCDで音楽を聴いたりすることと似ていて、想像力を掻き立てられるメディアだと思っています。台本のないラジオでは、パーソナリティーの「地」が出るものです。それがラジオ放送の難しさであり、面白さでもあります。パーソナリティーには「番組が終わったら、次の放送までに何を食べ、何で笑って、何で泣いて、どんな風が吹いて、どんな匂いを嗅いだのか、しっかり感じ取っておくこと。感じ取ったことが全部出るから」とよく話しています。

また「購買行動の最終判断は音声メディアが決定づける」「ラジオは祭りのメディアだ」というお話を伺ったことがあります。ある広告データでは、ラジオでパーソナリティーが紹介した商品のほうが実際の購買につながりやすかったという事例もあります。

ゼロスタがある駅前広場では「えきの笑顔まつり」を毎年開催しています。40周年の取り組みも通じて、ラジオで人を動かせること、人が動くところ色んなものが回っていくことを改めて実感しています。これからも人が集まるこの場所から大きな渦を巻き起こしていけたらと思っています。



イベント時はゼロスタの周辺に多くの人が集まる

● 変わりゆく時代と、揺らがない使命

新しい取り組みとして、昨年に山口県内のテレビ局3局との合同プロジェクト「やっぱりラテが好き」を発足しました。「ラテ」はラジオとテレビの頭文字で、新聞のラテ欄と同じ由来です。山口県はマーケットが分散しているため、「コマーシャルを流しませんか」と声をかけても「県域での広告はいらない」という答えが返ってくることも少なくありません。

そうした中で、電波メディアをもっと活用してもらえよう、放送局が連携して業界を盛り上げ、県民に安全情報もエンターテインメントも届けるインフラとしての役割を果たしていこうという取り組みです。各局のアナウンサー・パーソナリティーがコラボして山口の魅力を届ける動画コンテンツを配信したり、県内各地のイベントや祭りでステージを盛り上げたりしています。全国でも珍しい事例として問い合わせをいただくこともありました。

また、ラジオそのものへの接触機会も変化しています。新型コロナの流行以降、在宅での作業が増え「radiko（ラジコ）」を通じてラジオに触れる人が増えました。ラジコの有料会員なら県外でも山口の番組をリアルタイムで聴くことができ、東京都内だけで約1,000人がエフエム山口を聴いています。これが多いのか少ないかは分かりませんが、県外でも聴かれているということは嬉しく思います。

一方でAMラジオのFM転換、ラジコの普及、高速道路トンネル内のラジオ受信設備の更新を休止する動きがあるなど、メディア環境は変わり続けています。ラジオがなくなることはないと思っていますが、時代の流れによって免許制度のあり方が変わる議論が出てくることもあるかもしれません。それでも、地域の重要なインフラの一員であるという自覚は揺らぎません。エンターテインメントで地域に潤いをもたらす、緊急時には即座に情報を発信できる存在であり続けること——エフエム山口はこれからも、あなたに寄り添う明るくて心温かいFM局でありたいと考えています。